

しもありしなるべく、又或者は二三を兼ねたりしなるべし。

昨年の史學地理學界

序言

歳首に際して特に、本欄を設けたるは、昨年の例によりたるものにして、主正大正六年中公刊せられたる著書、雜誌掲載の論文の内容を、概括若くは採摘して批評と論議とを避け専ら忠實に學界の大勢を報道せんとするものなり。只紙幅限りあるために時に煩簡の等しからざるものは、讀者の賢察を乞ふ所なり

史學界

概況

昨年の史學界を回想すれば斯界の狀況の年を逐ひ隆昌を致せるを認めざるべからず。近時夏期講習會の開催等により、史學

の知識が一般社會に普及せらるゝ風潮あるに際して、昨年、東京文科大學が初めて夏期講演會を開き、史學に於ては三上教授が「勤王論の發達」を講演ありしは、數年來開催の京都帝國大學の夏期講演會に於て、喜田博士が「本邦古代史管見」の講演ありたると共に、權威ある専門的研究が一般社會の知識の向上に資すこと少からざるべし。

地方に於ては、日本歴史地理學會の夏期講演會の如きは、地方の歴史的研究の興味を刺激し來りし所なるが地方史蹟保存事業は近時漸く注意を惹くに至り、昨年度に於て計劃着手せられたるもの

十年春止月。是月以ニ大山下一授ニ達率谷那智首^{閉ニ兵。}

木素貨千^{閉ニ兵。}憶禮福留^{閉ニ兵。}答休春初^{閉ニ兵。}

天智天皇紀。

三年潤八月辛亥朔庚申。詔諸國司曰。其兵士者。每

於一國一四分。而點共一令レ習武事。十一月己卯朔丙戌。於市中一褒美追廣貳高田首石成

持統天皇紀。

に、京都府福井縣等あり、又地方に於ける考古學的の發掘は一時流弊を醸成せんまでに盛なりしが、昨年は専門學者の指導の下に、學術的發掘の行はれしもの少からずして、上代遺蹟に關する研究が長足の進歩をなさんとするは注意すべき現象なるべし。是時に際して多年郷土、傳説の研究機關として盡したる「郷土研究」が休刊の止むなきに至れるは最も惜しむべきも、又雜誌「教授資料歴史と地理」が創刊せられて、歴史地理學の知識を普及し特に其の教育的應用方面に力を致さんとするは蓋し斯界に於ける一部の缺陷を填さんとするものにして、「日本歴史圖録」が逐次刊行せられつ、あると共に歴史的趣味の向上増進に資する所大なるべし。東京文藝大學教授三上博士の爲に昨秋在職二十五年祝賀式の舉げられたる亦慶賀すべき事に屬す。

史學一觀 史學理論、方法論、並に歴史教授法等に關する論者は歳多からざるを常とするも、昨年の史界が之れを其前年に比して此方面の研究の更に少きは槽、寂寞の感なき能はず。研究法に就いては、國史研究法(大類伸、國史講習録)が前年より引き続き一般史學研究法を平易に講述しつゝ、あるのみにして、歴史哲學に於ては「カントと現代哲學」(桑本嚴翼)を擧げざるべからず。本書は哲學史上のカントと現今の哲學中に生けるカントの哲學を考究せんとしたるものなるが、史學に關しては、カントの歴史哲學

と現今の歴史學理論に於けるカント哲學を論評せる點、重要にして方に注意すべきものなるべし。即ち本書第十章文化の諸問題の中に於て、カントの歴史觀を叙し、其の歴史觀の特點は、形而上學的見地より脫離して、人類の歴史と自然の歴史とを根本的に區別し、人類の歴史に於ては道德を以て歴史の先天的要素として之れにより自然史と嚴密に區別せらるゝものなりとする所にありとし、而して其歴史哲學は、ヘルデルの形而上學的的世界觀又はヘーゲルの歴史事實の哲學的組織と異り、歴史に關する批評的哲學、歴史的知識の可能の問題の研究なりと論じたり。又第十二章カント哲學の意義中に於て、新カント派として算ふべきヴンデルバントよりリッカート一派の獨逸西南學派の主張に論及して、自然科學に對して歴史學、又は文化學を認めんとする此派も、出發點に於てはカントの批判哲學を脱するものにあらざりとして、大體に於てカントの「判斷力批判」を所依とするものと見るべきことを論ず。又、本書第二編は「研究及び補遺」として著者の舊稿を收め、其中「カントの歴史哲學について」「井ルヘルム・ヴンデルバント」等あり相對照してカントの歴史哲學の組織と系統とを考ふべきものなり。尙史學に對する論議には、「歴史學の進化と予叢の行動進化學」(下澤瑞世、東洋哲學)あり、著者一個の行動進化學なるものを史學の内に建てんと説くものにて、文中歴史に關する

諸家の説多く排列引用せり。

歴史教授法に於ては「中學校に於ける西洋史の教授法について」

（新見吉治、史林）あり。中學に於ける西洋史料は近世、最近世史を詳細にすべく其中に於ける民主的傾向、革命の説明の如きも、之れを避りんよりは寧ろ詳細に授けて革命の功過につき判斷力を養成せしめ、革命の慘害を知了せしむべし、民主思想の傾向に就いても、我國昔時よりの民本主義を明かにして國體の精華を説くべしとす。其他、我國氏族制度、祖先崇拜の眞意義を明かにすべきこと教科書の記述法、歴史科教授に於ける推理力の養成法等を論ぜり。（西田）

國史 吾人は過去一箇年間に於ける國史學界を概觀するに當り、先づ時代の前後に従つて古代より始めんに、「古傳説上の高千穂峯」（喜田貞吉、歴史地理）が少くとも後世日向の民間に於て天孫が日向肥後豐後境上の高千穂地方に降臨せられしとの傳説が専ら日向にのみ發りしより、霧島山を以て高千穂に擬せしなりとの解釋を下し、「所謂『神籠石』に就て」（白鳥庫吉、史學雜誌）が實地踏査に依りて城廓説に左祖し、朝鮮山城と同系といはんよりも寧ろ滿洲蒙古の山城と同系といふべく、其工事の設計實行共に朝鮮人の手に成りしならんも其間亦日本固有の築寨を加味して在來の木柵の根止めに應用したるらしく見ゆ、巨大なる石を使用せるは嚴

石崇拜の表現なるべしとの斷案を下し、又「佛教渡來前の神々」

（和辻哲郎、思潮）が大物主神、住吉大神の如き神々が、太古日本を領有したりし狀態を思浮べて古傳説の心理に觸れんと試みたるが如き、何れも我太古史の解釋上に一新生面を開きしもの、「國史八面觀」（久米邦武）は奈良朝篇を出して當代の側面觀を試み、「平泉情史藤原秀衡」（藤原相之助）が平安朝末期に於ける奥州を説けば「平安朝末に於ける社會の解體と鎌倉初期民心の動搖を叙し新佛教興起の因由を論ず」（大塚德城、歴史地誌）が主として京畿の社會狀態を述べて、人心の不安を語り、「都鄙和睦に就いて」（渡邊世祐、史學雜誌）は文明十四年の幕府と鎌倉府との和睦の經過として上杉房定の活動を叙し、和議の條件として政知より伊豆一國を成氏に渡し、成氏は政知に料所を給する事ありしこと、これに依つて關東の小康は得られたるも、兩上杉氏の反目を醸せりさて關東の狀況を説けるに對して、京都の公家生活を描ける「東山時代に於ける一縉紳の生活」（原勝郎、藝文あり、東山時代を藤原時代に比擬して復古時代なりとし、鎌倉文明は京都文明に征服され武家政治は舊文明を根本的に變更し得ざりしも武人化せりさて西歐のルネッサンスと比し、三條西實隆を其對象として縉紳の生活を叙述し、日今近世史（中村孝也）は其第二卷として「國一統一の時代」を出し統一綜合は桃山時代の精神にして、古來の傳

説は其權威を失ひ、生氣充溢したる時なりとせり。降りて「五箇條御誓文の由來」(金子堅太郎、國學院雜誌)は三岡八郎が鼻紙に毫を馳せたる五箇條御誓文、草案が王政復古の精神と不相應に平民主義を含める所以は横井小楠の國是三論に其準據を見出し得べしとせり。此他江戸寛都に關する論議あるもそれは後項に收めん。次に人物を中心として時代を説き、又は其評傳を叙せるものとして、「聖德太子傳」境野貞洋)は著者の舊著を補訂改竄し、太子の事業として當時の弊を矯めたる禁獵、國史の纂修、池溝開鑿工藝繪畫の奨励、音樂の學習を述べ、「賴朝と年號」(平泉衛、史學雜誌)は賴朝が安徳天皇の御西幸後後鳥羽天皇の踐祚を機として治承を捨て壽永の年號に従ひし態度を見、「河野通治歿年考」(西浦泰治、伊豫史談)は貞治三年十一月廿六日なる事々證し、「南朝の隠れたる勤王家」(大西源一、史林)は元弘の變に崛起して勤王を首唱したる僧垣常昌、家行長官の思想と著書を論究して、神皇正統記は渡會神道に負ふ所大なりと論じ、「後醍醐天皇と文親僧正」(黒板朝美、史學雜誌)は天皇の建武中興に於て眞言宗々中心としたる寺院の勢力を利しせらるゝために、文親僧正に信頼し給へるを説き、「足利尊氏の信仰」(辻善之助、同誌)は尊氏が騎虎の勢已むを得ずして反旗を揚げたるは順逆の道を誤れりと雖も其後自己の非行動をば悔恨して罪障の消滅を祈願せる信仰と其偉

大なる心情とを認め、「夢窓國師」(同人、禪宗)は尊氏、直義兄弟は禪師を渴仰せしも禪師は自ら求めて權勢に接近せんとせざりし高潔なる品性を賞揚し、「石川丈山論」(三浦周行、新日本)は疑問の人丈山の性格は自信強く且つ名譽心に富める克己清廉の士なりとせし、大阪夏陣に於登の功名を立てながら家康の勘氣に觸れしは軍令を犯したる爲にて彼自らも深く自己を責めたりしが老母の爲に其意を曲げて、藤堂、淺野兩家に仕へたるを認め、幕府の隠目附たりしとの説を排し後年の隱遁の眞因を時代共通の傾向に求めんとし、「深草元政上人と其時代」(同人、太陽)は元政の人格經歷著書を論じたる後其時代を觀察し、家康の政策の矛盾と冷酷とを指摘して、かゝる時代に憤死者自殺者發狂者隱遁者等の出づるを當然なりとしたりとは別編と共に、時世の個人に及ぼす影響を重大視したるものなり。「壽貞は芭蕉の妾に非ず」(藤井乙男、藝文)は芭蕉の乳母なりと斷じ、「考證學者としての伴信友翁」(阪倉山太郎、史林)は信友の研究の多方面に亘りて周密精確に、其論調は穩健公平にして歴史的考證家の巨擘なりとなし、隠れたる陽明學者淵岡山先生」(高瀬武次郎、史林)は岡山と藩山との藤門の二大儒者を比較して、前者が後者の如く名聲を馳せざるを其一意専心藤樹の説を遵守して之を後進に傳へたりしに歸し、「大鹽中齋の學説」(同人、哲學研究)は實行せんが爲の學説にして、學

兵は歸太虛主義の實現にあり、之を輕舉といはんよりは寧ろ勤王の魁と見るを得べしと説けり。

僧侶の傳記を研究し、論評したるものには、本年が恰も黃檗宗祖隱元禪師の二百五十年遠諱に相當し、三月七日には特旨を以て眞空大師の謚號を宣下せられしこと、隱元研究大に行はれ、雜誌「護法」及「禪宗」は各記念號を發行せり、就中後者の「後水尾法皇と隱元禪師」(倉光浩文)は禪師の黃檗禪は龍溪を通じて法皇に分付せられたりとし、大光普照國師の號を賜ふに至れる經路を説けり、「我邦の佛教史上に於ける傳教大師」(松本文三郎、傳教大師一千百年報恩傳道講演集)及文化史上の傳教大師(三浦虎行、同書)は一は佛教史上より一は文化史上より傳教の事業を批判せるもの、「榮西禪師渡天の企圖に就いて」(上村閑堂、禪宗)は其目的が當時南部北嶺以下各大寺の戒行頹れしを見て渡天と自ら嚴肅なる戒律の行者たらんと企てたりとしたるを辨じ、「虎關禪師」(足利衍述、禪宗)は禪師の國體論が當時の禪家に傑出し且つ宗學研究家としては中廢禪師、玄惠法印の先驅をなせるを説けり。又「貞觀政要と日蓮上人」(田中義成、人文)は日蓮が鎌倉時代に特に尊重せられたる貞觀政要を手寫して研究せしを懽懽憂國、救世の大抱負を以て當時政治の根本を了解せんと思はしものと解せり。對外關係の史論として「海外交通史話」(辻善之助)は「任」の興廢と物

部鹿鹿火の妻」より「徳川家光の支那侵略の雄圖と國姓爺」に至る迄時代を追うて外交と文明との關係を説くに努めたるが、其「鎖國とその得失」に於て、損失甚る大なりとしか結び「日本文明の性質」を説いて、必ずしも獨創的文化無きに非ざれども只斷續的なりしたために大發展を見ざりきといへる點は注目し價すべし。南蠻圖來に就て(藤田豐八、藝文)は長徳三年、寛仁四年の南蠻圖來が高麗人又は琉球人と想像されしに對して、承安二年に日本に入寇したる毗舍耶人に非るかとの一説を提供し、琉球人南洋通商の最古の記錄(同人、史學雜誌)は琉球殊に宮古島人が元延祐四年の頃馬來半島の南端と通商せるを認め、「三百年前日本と臺灣との經濟的關係」(内田銀藏、史林)は當時邦人渡臺の目的は他地方に趣く遂次に寄航し、他地方への活動の根據地とし、又、本島の富源に注目せし事の外に、支那人及西洋人と貿易し得べかりし事を看過すべからずとし、支那本土の生糸及絹織物、歐洲及印度の珍品の本島を經由して我國に輸入せられ、又我國より輸出せし銅鐵は島人の需要を満たすよりも寧ろ在留支那人に購入せられしを指摘し、「貿易史上の平戸」(村上直次郎)は博く内外の史料に據りて平戸の貿易史上の功績を挙げ、慶長前後の輸入品及其價格、商館員參府の經費等について精密なる調査を試みたり、「三浦の安針」(加藤 吾及、徳川初期の海外貿易家)(川島元次郎)亦それ

る、持々の研究として併せて看るべきなり。

次に各種の文化に關するものを瞥見せんか、第一法、經濟方面に於ては前年よりの續稿たる、「德政の研究」(三浦周行、國民經濟雜誌)の昨年に於て完結せるあり。永仁五年の德政令の内容を細叙し、此不自然なる保護政策が却て一般經濟界の大恐慌を生じて御家人を苦めたる爲翌年早くも廢止せられしを説て、其後止安二年延慶三年に復同令の發布ありしとの説を否定し、更に遡つて德政の起源を幕府の法令に求め仔細に文永以降の立法の性質を究め永仁德政と全く同一なるもの無りしと斷じ、其原因として法律的原因社會的原因を挙げたる後武家の德政には公家法の影響あるを論じ而も從來一般に認めらるゝが如く古代の朝廷の德政に基けるに非ずして社寺領又は公田の無効返還に傾ける同時代の朝廷の德政に負ふものなりと斷ぜり。「座の研究」(同人、經濟論叢)も昨年に至りて完了し、經濟史上重要な商工業の座に就て座共者の記録より主として中世地方商業の座に關する研究を試み、當時自衛上市場相互に或程度の聯盟ありし事を認め、商工業の座の性質としては座賄、立賣、振賣の論なく同業者の組合員たる座人は必ず或種の特權を有し、朝廷幕府社寺等を其本所としたりしを認め「座の源流考」(中山太郎、歴史地理)は社々上の勢力を有せる者が特定の座席を占め一般より神聖の不可侵物として尊重せられし

思想は原始時代よりして世界共通に存在し、我國に於ても座の源流たりしこと、「座の起源と其語原」(三浦周行、國民經濟雜誌)は座の起源としては古代の品部の間にも其萌芽を認め得べく、平安朝時代の如きも亦座の如き者の存在し得べき社會事情にありたりと、轉じて座なる名稱は鎌倉時代の末期を初見とすべく、二人以上同一事業に従ふ「組合」を意味し、必ずしも社寺に關係なしと斷じて福田博士、柴學士の説を排せり、「太閤極地の研究」(牧野信之助、經濟論叢)は假の大抱負は其始終の慶長年間までも極地を止めざりし事より除地の理由に論及し、「徳川氏の豊臣氏財政難亂證」(三浦周行、國民經濟雜誌)は秀吉薨去後の淀君が亡夫の冥福、愛兒の武運を祈らんとして社寺の修造再興をなせるは當時の信託狀態に於て寧ろ當然の事にて、徳川家康は此自發的行爲に乗じて其財政擾亂を助長せりと雖も、當時の豊臣家及其遺臣は初は却て之を喜び後にこれに氣附ける時は既に太だ遅かりしとなし「參覲交代制度の經濟觀」(本庄榮治郎、經濟論叢)は三百諸侯を統御するために案出せし此制度の幕府の權勢衰ふと共に漸次廢頽せしが幕末對外關係生じて日本國を一國として外に對すべき時期に際しては此制度の改革の一層切實となりしを論じ、此制度が幕府より以前に弛廢し、幕府の實力が此制度の廢頽と共に減失せるを説きしは何れも經濟觀より豊德二氏興亡の跡を究めたるものなり、

「日本人に法を國氏の素質ありや」(三浦周行、京都法學會雜誌)は鎌倉時代には不完全ながらも法治國の萌芽とも看做すべきものなりしに、江戸時代に至りて封建制の完成となり警察國家を組成せるも先天的に法治國民としての素質なきに非らずとなし、「大名領地の裁判制度」同人、同誌は大名の自分仕置は委任裁判の如き有様なりしが、公儀仕置との標準關係は元禄十一年六月の達に定り其後多少の修正を加へて公儀仕置の範圍擴張せられ、遂に地方自治の精神を喪失するに至れりといへるは前論文と併せて著者の法制史觀を付度すべし。「祖先祭祀と日本法律」(穗積陳重)

は著書の講演草稿を邦譯したるものにして、祖先祭祀概論より祖先祭祀の法律に至る三編十六章及附録一編より成る。而して養子、相續の章は其最も力を用ゐたる所にして附録の異姓不養に關する論文は、徳川幕府養子法の嚴酷なりしために正妻事件を誘はせりと述べたり。更に信仰方面に目を轉すれば前記編徒を中心としたる史實及時代觀の外、惠比須大黒(内田銀藏、黒潮)は兩者の共に種々の思想の結び付きて生じたる今成のものなりとして其の研究法を説き、「夷神考」(喜田貞吉、歴史地理)は夷神の根元とも見るべき西宮夷神の由緒を研究して今の串神は古の三郎殿即事代主にして今の大黒天は古の夷神なりと論じ、もと武神なりし夷神が漁業航海の神として信ぜられし後性格を變じて商業福德の神

となれりと説く、「神社研究の趨勢」(加藤玄智、全國神職會々報)に對して「神社と宗教」松本文三郎、哲學研究あり、二者の限界を究め、皇祖、皇宗、歷代天皇國家に功獻したる偉人傑士を神體とする神社は非宗教的にして其他は宗教的と見做すを適當なりと論じ、「平叙日本佛教」(藤本慶祐)「印度の佛教」(萩原雲來)の二者は前者が難解なる佛教を平易に説明せんとし、後者が難澁なる印度佛教を簡單に闡明せんとする點に於て共に觀るべきものなり。

藝術的方面にありては、「我國の印章に就て」(黒板勝美、國華)は平安朝期までの印章は隋唐文明の影響を受けたる時代とし、宋文明の輸入によりて宋朝印章の用法を傳へ新しき意味の印章を出現せる中世を叙し、戰國時代以後が上古期の復興にして印章制度の最も發達せし時代なりといひ、「春日懺現記に就いて」(和田英松、國華)は其發願者が西園寺公衡、詞者の作者が共同母弟覺圓にして慈信、範靈兩僧正の批判を請ひ、其忠父子四人これを書し高階隆兼これを描きしものなれば給卷中由緒傳來の最、正しきものなりといひ、「御物繪師草子に就いて」(澤村專太郎、同誌)は其製作年代を鎌倉末期に置き、信實の筆なりとする傳説を排し、書畫一筆の說のみはなほ有力なる一説としてこれを保留せり、「岩崎家藏傳公任筆和漢朗詠集に就きて」(尾上八郎、同誌)は長保寛

弘乃元至永頃寧ろ寛弘に近き時期に無名の能筆家に依り書寫せられたりとし「岩崎家所藏和漢朗詠抄の料紙に就て」(藤懸詳也、同誌)は唐紙の種類には支那輸入品、支那の圖案を譚案せるもの、本邦獨創の文様を附せるもの三種ある中に、本抄のは支那舶載のものなりといひ、唐紙の使用は王朝時代の外、徳川初期に復興せられしものにして鎌倉足利時代にはなしと附言し、又一醍醐寺所藏の佛畫に就て(同人、同誌)は多數の佛畫が一所に集藏され、連續したる系統に屬し圖樣にも描法にも他の影響を排除して古樣式を傳へたるは密教の事相のためなりといへり、洋畫の研究に關しては、和蘭傳來の洋畫(新村出、史林)及「亞歐堂田善の銅版畫に就て」(澤村專太郎、國華)あり、前者は享保時代が洋學史上のみならず洋畫傳來史上にも重要な時期なりしを認め、銅版畫の傳來も和蘭系統のものには萬治の頃に傳來せるものありて公侯の注意を惹きしが、明和安永の頃は「新時期を譯し其中心人物は平賀源内にして江漢は此時運に育成せられ、其影響の文晁華山の外北齋廣重にも及ぼし、を説きしに對して、後者は江漢とは別系に出でたる田善が共に近代洋畫と銅版術との隆興に興りし功績を大なりとせり。思想の方面に於ては「日本の文化に就て」(和辻哲郎、思潮)ありて「古代日本人の混血狀態」(同人、同誌)を考察し、秦漢人又はそれら外來人との混血兒たる古代日本人が印度文

化攝受の素地ありとせしは「佛教渡來以前の我國民道德」(同人、同誌)と共に古代史解釋の上に見逃すべからざる觀察ならん。「天鳥船」(米田庄太郎、藝文)は記紀に存する天鳥船に關する觀念及意義を考察してフロベンス氏の鳥船傳説に關する説に一致せるを認め紀に全く合理化せられて傳はれる天鳥船の觀念は始め神話的意義を有し、靈魂を天に運ぶ船を意味したらんと説き「國民道德史論」(河野省三)と「文學に現はれたる國民思想の研究、武士文學の時代」(津田左右吉)とは此方面の双璧にして後者が承久の頃より寛永頃に至る中世の思想を文學上より三期に分ちて公家文學が武家、僧侶の手を経て民間に推移せし有様より之に伴ふ思想の變化を見て三河武士の主從關係が武士道の發達完成に多大の貢獻ある所以を説きしに對して、前者は其武士道と神道とを大組織體となせる我國民道德を觀察考究して、武士道は我國固有の國民精神が武士社會の生活に應じて發達せる實行的道德なると共に、神道が國民固有の根本的道德信念にして國民生活上重要にして且永續的價值ある國民道德の基礎たるを説き、其發達の跡を辿りたるあり。風俗に就ては「日本風俗志」(加藤咄堂)の著あり。「風俗より見たる足利前期の茶道」(櫻井秀、風俗研究)は室町初期までの茶會が一種の遊戲にして禮儀に非ざるを指摘し、「維新後に於ける女官服飾の推移」(同人、同誌)は外界の變化の如く速かならざ

りし官廷服飾も明治五年五月以前には聖上の御服にも西歐服制の侵入ありしを指摘し、又「文學繪畫上に見ゆる幽霊」(江馬務、藝文)は桃山時代を境界として幽霊の性質に二時代を劃し得べきを説明せり。

眼を轉じて歴史地理に關する方面を見れば、交通に關して、「飛脚の變遷」(本庄榮治郎、經濟論叢)が幕府繼飛脚、大名飛脚、民間飛脚を叙し、一個の營業と看做され公益機關たる觀念を有せざりし飛脚業の發達を見ざりし由來を明にしたるは、「新井白石の諸街道取締」(極細雪湖、歴史地理)が雲助の弊害を記せるを併讀して啓發すべく、「町人の都」(三浦周行、大阪朝日)は大阪を中心として文化の推移を語り、「三國港に就て」(牧野信之助、史料)は此港の發達と其背後の莊園との關係を説き、「琵琶湖の航路」(中村直勝、歴史地理)は坂本が中世までに占めたる交通上の位置を窮めて北國と京師との交通系を考ふるに資せり、其他「尾參遠郷土史論」(日本歴史地理學會)が該地方の上古より近代に至るまで實を収めたる外に、東京奠都五十年に際會して「東京奠都の真相」(岡部精一)は奠都の由來を説いて東京奠都が遷都に非ずとの著者の見解を證明せんとし、「東京奠都と明治天皇の御東幸」(同人、地歴叢報)にも亦これを繰返し、雜誌「歴史地理」は又「江戸と東京」と題する特別號を發行して「江戸以前の江戸」(喜田貞吉)以

の數編を収めたりしが、これに對して東京奠都は遷都なり(同邸翁老、日本及日本人)は東西巡幸の名の下に一時東西兩部の併立の狀ありしは遷都の過程上已むを得ざる處にして京都留守官の廢止は遷都の意志表現なりと論ぜり。

民が人種に關しては「古代に於ける武士の名稱と民族的研究」(喜田貞吉、史料)は古代と平安朝中期以後とにて武士の意義を異にするを辨じ、武士となりし民族は天孫族に屬する者少からざるも、其多くは荒服異俗の民にして中にも東人の如きは東國武士發生の素地をなすといひ、「久米部考」(同人、歴史地理)は久米部を以て準人族に緣故深き種族なりと斷じ漢籍に見ゆる倭人記事の解釋(同人、同誌)は倭人考の別篇なり。「秦人天日槍」(同人、同誌)は天日槍傳説を研究して其傳説の分布と銅鐸發見地の分布とに或關係あるべしとせり、又「賤民名稱考」(新村出、經濟論叢)は平安朝末より鎌倉時代に亘る時期が國語沿革史上に於て注意すべき時代なりとし、王朝時代所謂「ふさり」が鎌倉時代以後に「ふた」となれりと説けり。

最後に史料に關するものを舉げんに、「史料としての日蓮上人遺文」(姉崎正治、史學雜誌)は他の史料と參照すべき記事、他の史料を補ふべき記事、上人一生に於ける政教關係記事の三段に分ちてこれを説明し、元寇を豫言せりとの説に對しては經文の信仰に

依る直覺的判斷と夢想、又は天象の解釋によりて來寇ある事を信
 じ之を公言せるものなせり、「慈性日記」西田直二郎、歴史地
 理)は大阪落城後秀賴生存の風説ありしを記せり。其他の刊行物
 としては、「大日本古文書」に「相良文書」に「觀心寺文書」(史料通
 覽)に「山槐記」に「勘仲記」に「兵範記」にあり、「列聖全集」は
 宸記集二卷を公にし、伏見院御記「後伏見天皇御記」花園院天皇
 宸記「等稀觀の史籍を公にし別に「皇室御選解題」を附せり(國史
 叢書)は「蒲生軍記」「朝鮮征伐記」を出して第一期を終へ、更に第
 二期に入りて「武野燭談」「浮世の有様」「玉露叢」「承久記」「磯城
 の探湯」を出し、「日本偉人言行資料」は「羽林源公傳」「御行狀記
 料」「蚊遣火」「先哲叢談續篇」「夏將言行錄」「貴血者草」「圓心上
 書」「御景錄」「事語繼志錄」「重矩常行記」を續刊し、「國書刊行會」
 の「柳營婦女傳」「三十幅」「百家隨筆」「竹橋餘筆」は又以て史料に
 當つべし。「大日本地誌大系」は諸國叢書として、北陸之章「木曾
 之貳」を出して本年度の刊行を止め、「日本傳説叢書」は「北武藏」
 「信濃」「阿波」の三卷を發行したり。其他「廣文庫」「通俗經濟文庫」
 「江戸叢書」は前年に引續きて刊行せられ、「群書索引」「京都叢書
 索引」は完成せしが、特別保護建造物及圖書目錄」と共に索引上
 の便宜多し。(中村)

朝鮮及滿洲が學問上實際上より其將來を卜せるあり、特殊の研究
 としては「新羅末の進禮城に就て」(池内宏、市洋學報)は此城が
 羅王景明の四年、後百濟王顯基の來り侵入し、處にて、從來其位置
 不明とせられしも、今の榆川の傍なる烏嶺山にして、進禮は仇万
 或は烏嶺の譌誤なりといひ、「高麗恭愍王の元に對する反抗の運
 動」同人、同誌)は王が金瑯、鄭世雲、柳淑等と謀り元の衰微を
 機として獨立を企て、元と連姻せる奇氏を誅し、鴨綠江西の八站
 を攻め、元の正朔をし、官制を復舊したるが、元は脅懾を聲言
 して遂に來らず、王は更に支配者の撤退を、領土を要求せるを
 説けり。「朝鮮の倭寇」(三浦周行、山林)は日本及び朝鮮側の史料
 を參照して、海州常 者の三島以外九州中國四國に互りてこと、
 之に對して朝鮮が已亥東征の跡に鑒み、一面攻撃的防禦をなすこ
 共に宗氏の懷柔に成功して、倭寇撤退の事實を見るに至れるを論
 じ、「朝鮮最古の地理志」(同人、藝文)は普く世に知らるる東國輿
 地勝覽よりも、慶尙道地理志の世宗七年十二月に成りて更に古き
 ことを述べ、此書の詳細なる解題を施せり。又「朝鮮に於ける契丹
 及女眞語學」(小倉進平、歴史地理)は高麗が成宗の十二年、契丹
 の入寇を受け、其正朔を奉ぜし翌々年より語學生を契丹に遣はし
 しかば實は内心彼を輕侮せしかば外交上の辭令を知る爲に學習せ
 しに過ぎず、高麗人の女眞語研究は睿宗の頃より稍行はれ、高宗

の時女真小字を學び、李朝には世宗の八年女真語の通事を置き、司譯院にて譯官採用の試験を行へるを説き、「朝鮮史の架」(今西龍、史林)は増補文獻備考、宣和奉使高麗圖經、八城志、東京雜記、大東輿地記等の解題を試みて完結せり。其他朝鮮に關する論文には「朝鮮の石戰風俗」(八木獎三郎、人類學雜誌)、「百濟王朝の遺蹟」(徳田猪一郎、禪宗)、「朝鮮警察の沿革」(對馬郁之進、京都法學會雜誌)、「新羅雜林名稱考」(清水元太郎、藝文)等あり。

〔有高〕

〔東洋史〕 昨年の東洋史學界は國運進展の機勢につれて大に活氣を呈し、先づ一般的の論議としては、既に年頭に於て「東洋史研究所感」(桑原隲藏、日本及日本人)中に支那歷代正史の本文の校勘、及び註解の整理の不朽の大事業にして我國の學者に尤も適切なること、及び東洋史參考書、東洋歴史辭典等の編纂の緊要なることを唱道せるあり。「支那學研究者の任務」(同人、太陽)には本邦の支那學者の歐米の學者に倣ひ科學的研究の精神を一層旺盛にして特に綜合的研究をなすに努むべきこと、並に常に一般公衆との接觸を保つに留意すべき事等を述べて大に我學界を刺戟せり。次に「支那研究に就て」(上田萬年、人類學雜誌)は我國人が今後世界に率先して支那研究に努力し、東洋學の進歩に貢獻すると共に彼我國有識者互に文化的理解を有し交誼を厚くして適當に彼國

を指導すべく、其手段としては日本博物館に東洋の人類學的土俗學的の材料を多く蒐集し又支那に邦人經營の大博物館を建設し、大學の研究も特に此方面に力を注ぐべきことをいひ、「支那の學術的調査に就て」(早坂一郎、東方時論)の亦同様に支那の調査研究の必要を高唱せるは、共に當面の急務を道破せるもの也。一般的の研究としては「支那史上より見たる忠孝」(市村瓊次郎、東亞の光)「歷史上より見たる支那國民性」(安岡秀夫、新公論)「支那文明の精神」(猪狩又藏、國學院雜誌)「支那の共和思想」(遠藤隆吉、東方時論)「支那の教育に就て」(大村欣一同誌、等皆注意すべく單行本としても「東洋通史」(高橋與惣資)「第二回支那半鑑」(東亞同文會編)等の出版は有益なるものなり。

政、法、經濟の分野は例年になき盛況にして「支那に於ける政治學說の系統」(稻田周之助、法學新報)は堯舜時代民主主義の發生及び儒、墨、道家の學說を述べて傳統を明かにし、「東洋古代の社會政策」(瀧本誠一、經濟論叢)は周代の所謂王道の精神が民を本とし天命を重んずる善政を施すに在りて近世の社會政策と相接觸し、希臘古代に存せし政治思想よりも遙に進歩し、之が日本にて最もよく實行せられしを述べ、「支那政治史より見たる支那問題」(松井等、東方時論)は清朝の滅亡と革命運動とを前後の大勢より論究せり。尙近時の政變に關しては「支那第一革命より第三革命まで」

(吉野作造、國家學會雜誌)「支那の第三革命」(同人、史學雜誌)及び「支那革命史論」(同人、東方時論)「支那革命小史」(同人、單行本)等あり。其他「支那法と姦罪」(東川徳治、法學志林)「支那法上より見たる婚姻の豫約」(同人、同誌)「支那に於ける妾の制度」(同人、法政論叢)は皆特殊の有力なる研究なり。經濟史に關して「支那經濟思想の出発點」(小島祐馬、經濟論叢)は儒家道家の欲望制限論よりして節用、賤商、賤貨、社會分配問題等を生ぜしが支那經濟思想の世界主義の上に立脚せるは特に注意すべしといひ、「墨子の經濟思想」(同人、同誌)に於ては其兼愛、節用論を詳細に解説せり。「經濟史上より見たる支那佛教徒の地位」(嵯葉岩吉、東亞經濟研究)は佛教が貴族政治の行はれし漢唐の間に大に發展せしかと宋清間の專制時代に入り漸く衰頹せることと、六朝より唐代の度牒、寺産、像設等につきて詳述し、唐の莊園の性質及其由來(加藤繁、東洋學報)は莊田、莊園、莊主が今日の莊の意にて、所在に城内、城外の別あれども、單に娛樂の場所たるに止まらず、水田、陸田等附屬して子孫相承の財産となり、小作人もありて村落を作るあり、遂に莊、莊田、莊園の名の下に別莊の有無に關せず貴族の所有地を指すに至れりとなし、其起源を土地の兼併に歸せり。又「宋代の茶法茶馬」(松井等、東亞經濟研究)は茶の課税が唐の德宗の建中年間に始まり、宋初仁宗まで百年間

は權茶法に依り、爾後徽宗に至る四十年間は稅茶法を行ひ、而して此間神宗は蜀茶と番馬との交易せしめて契丹の防禦に備へ稽成功したれども、徽宗以後其法大に紊れたりと説き「鴉片と銀」、矢野仁一、同誌は鴉片が唐代に海外より傳來して底野迦といふ藥品に混入せしも支那人之を知らず、明の成化の頃より久病を治する効ありて民間に賣買せられ、嘉靖の頃藥効著しき偽諸藥に用ゐられて高價となりしが、清の康熙雍正の交より嗜好品として吸飲の風漸く盛になりと述ぶ。是等は何れも新生面を開ける有力なる研究にして、其他「支那上代の幣制」(田中忠天、東亞經濟研究)「宋理宗時代の幣制」(同人、同誌)「元代の海運と大元海運記」(有高巖、東洋學報あり)「支那の經濟力」(内藤虎次郎、太陽)は支那が三百年來外國貿易によりて銀を多く得しと、鴉片其他の輸入超過及近時の戰亂にて次第に銀を失ひ、銅錢も日本などに出て、國內に天然の富はあれども、實際の富の程度は意外に小にして、自ら支ふるに足らざる故、民國今日の急務は外資を入れて事業を起すと共に速に金貨本位に改めざる可からずと論ぜり。

外交の方面にては「漢人の外交思想に就て」(重松俊章、歷史地理)支那人は古來外交を國民生活の範例を破り先王の教化を毒する有害無益の業となしたれば、秦始皇漢武帝の遠略も根本の動機は消極的防衛的に在りしが、彼等は又半面に強靱なる同化力を有し接

屬せる他民族を漸進的に混化して儒教の理想を實現せりと説き、次に「唐時代の廣東」〔中村久四郎、史學雜誌〕は廣東發展史を七期に分ち、第三の隋唐時代に此港の繁盛の原因を對外發展の勢力充溢、六朝以來佛教の盛行、同内國の海運並に大食・天竺・波斯・崑崙舶來往の頻繁等に歸し、中唐に至り提舉市舶司の設置張九齡の大瘦嶺開鑿ありて貿易交通益隆盛に赴きしこと、及び中人の市舶干渉、奸吏の私曲、安南との關係、晚唐實の衰頹等を詳細に説明し、「宋代の市舶司及市舶條例」〔藤田豊八、東洋學報〕は宋初各港の市舶使は知州之を兼ね通判・轉運使之に副となり別に中央より歳派せる三班内侍が專任の市舶官として實務に當りしも、神宗の頃より轉運使と内侍とが實權を得しこと、並に當時の市舶條例には稅率、棹舵具、公據、文引、進奉、出銅、官吏服務、居留番人等に關する嚴密なる規定ありしことを精密に論究し、「宋末の提舉市舶使蒲壽庚に就て」〔桑原隲藏〕史學雜誌〕は彼が海賊を破りて出世の端緒を得、次で伯顔の勸にて元に降りし爲、宋元の勢力消長に大なる影響ありしことを述べ、海上交通史に重要な幾多の資料を提供せり。「日明交通に關する明史の誤」〔後藤秀穂、史學雜誌〕は明史に永樂初年日本船を十年一貢、舟三、人三百と限れりと記せども、こゝは嘉靖十九年の新制を誤りとなりと説きしが「永享條約に就て後藤君の説を評す」〔栢原昌三、同誌〕は此制限の懸

第三卷 昨年の東學地理學界

永條約〔明永樂二年締結〕に定められ永享條約〔明宣德五年締結〕に改訂せられしを述べ、後藤氏亦國學院雜誌にて之に答へたり。尙ほ史學會大會に於ては近世日支交通史資料として上崎の唐人、唐館、唐船等の繪圖百二十三點と長崎尋古圖二十點を陳列して一々説明を加へたるが珍奇有益なるもの頗る多かりき。

學術思想の研究としては呂氏に見えたる皇帝（武王義雄、史林）は黃帝又は上帝と同一にして五帝の傳説は之より分化せる神話に過ぎずといひ、「老子攷」同人、藝文〕は所謂五千言の後世の編纂なれば、老子の言を逸し、末徒の語を入れたるもの少からざれど今本道德經は玄宗の改削を経たれば、漢魏の舊本に優れりと説けり、又「漢代思想の傾向」〔宇野哲人、哲學雜誌〕は老莊の抽象的學說が漢代に神仙術となりて靜坐呼吸の法を行ひ、列仙傳の著あるに至り、儒家には此具體化の傾向一層甚しくして、四平の天を分ち、五帝五行の説を作り、星坐と日常生活とを相聯せしめしかゝる傾向の導因は學術普及の結果ならんも、魏晉以後之に對する反動起りて、再び理想論を現出せりといひ、「空儒の淵源」〔常盤大定、宗教研究〕は宋の性理學が佛教を根柢として遠く天台第六祖荆溪湛然に淵源し、湛然の説が梁竦に傳はりて彼の止觀統例となり、竦は李翱に傳へて復性書を作らしめ、此書より宋學生れたるが、這間の授受は靜座を以て體驗せりといへり。「憲宗通紀考

證」(内藤虎次郎、史林)は同書が元代御史臺の掌故に關する官輯にして、永樂大典の中に含まれ世に博く傳はらざりしを考證紹介し、又「譚嗣同の仁學」小島祐馬、藝文、「寥平の學」(同人、同誌)「章炳麟の學說」(本田成之、同誌)は何れも近時の碩儒の學說思想を研敘せり。

更に宗教の部門にては「支那佛教研究の範圍」(關田宗慈、六條學報)は從來歐米學者の所謂南北佛教區分の不正確にして佛說の非常に錯綜し、其根本が皆中印度に並存せしことを説き、單に支那佛教の研究といふも印度は勿論西域地方の諸言語にて記せる夥多の經典につき研究せざるべからずとて、其範圍の廣大に其事業困難なるを述べ、「迦膩色迦王に送れる馬鳴の書翰に就て」(幸本婉雅、宗教研究)は王の年代を定むるに有力なる史料を提供せり。

次に「碑文より見たる山東の佛教」(堀謙徳)は東魏以前には濟南泰安、帝州を中心として般若系統弘通し、北齊より省の全部に擴がり、唐代に最盛にして外に密教の流行するあり、宋元の間は禪宗化し就中元には喇嘛教を混ぜりといひ、「佛典翻譯史料考」(板原闡教、六條學報)は翻譯の語義と種類系統數字上より見たる譯經の發展、譯經の變遷、翻譯家等の各項に分ち支那譯經事業の大勢を通觀せり。「天台大師と其教學」(稻葉圓成、無盡燈)、「支井以前に於ける緣起說の譯傳」(花田俊雪、六條學報)「敦煌出勝覺經義

記」(矢吹慶輝、宗教界)は夫々主題に關する特殊の研究なり。又「支那國民性と道教」木幡恭三、單行本)は道教が支那人の思想、生活に最も深く關係を有せるを述べ、「英譯景教碑を讀む」(桑原隲藏、史林)は佐伯氏の著書の批評なれども、景教研究者には同書と共に必讀の文字なり。「利瑪竇傳續篇」(中村久四郎、歷史地理)は艾儒略の大東西泰利先生行狀の全文を掲げ、又利氏の論、坤輿萬國圖、利氏と西洋諸等につきて叮嚀に解説せり、尙十月發行のGeographical Journalにも利瑪竇の坤輿圖を研究せる二論文あり

「支那の國教問題と耶蘇教徒」(桑原隲藏、外交時報)は前年來支那國會の問題となりし國教制定の可否につき、從來の歴史、論理及國家の統治、耶蘇教との關係等の諸點より制定の有害無益なるを論斷せり。其他支那に現存せる「日本留撰文の碑」(上村閑堂、禪宗)は河南省嵩山少林寺と山東省靈巖寺とにある但馬僧都元至正元年撰同文の碑記を掲げたり。

風俗文字又は狹義の文化の方面に在りては、「殷代卜辭中所見先公先王考」(王國維著單行本)は内藤博士の「王亥」を讀みて更に新研究を試みたるもの、卜辭中の爰、土の解より、王亥の事蹟等を證核し、卜辭にありて史になきは皆諸帝の異名及其兄弟の即位前に殂去せしものにて、商の繼統法の弟に及ぼすを主とし、子の繼ぐを副とせりと斷ぜるが、「續王亥」(内藤虎次郎、藝文)は之を紹

介批評せるものなり。「支那考古學上より見たる古代文字」(後藤朝太郎、史學雜誌)は、藏、四、旂、乾、卑、丙等の文字の篆形に出でたるを説せり。次に「經傳に見えたる支那古代風習一斑」(服部宇之吉、東洋學報)は支那國民を理解せんとするには現代の風習より溯りて經傳に其淵源を求めざるべからずとて、衣、食、住、喪祭、車輿、夫婦、男女等に關する周代の制習と現今とを比較考究し、「漢代の舞樂と雜伎」(原田淑人、同誌)は之に似たる部分的研究と見るべきものなり。更に文化的方面にては「東洋に於ける印刷術」(那波利貞、歴史と地理)は支那朝鮮・日本に於る木版活版の使用を一般的に説明せるものにして火器火藥の發明使用は近年の史界を賑はせる興味ある問題なるが、昨午も此事項につき有力なる研究を發表せる二論文を見たり一は支那に於ける近世火器の傳來に就て(矢野仁一、史林)にして、北宋仁宗の朝に成りし武經總要に明かに焰硝、柳炭、硫黃の三種を混合せる近世火藥法を記せるを以て、當時より此製法の知られしことは疑なれど、單に爆藥たりしのみにて之を發射藥とせず。文永の役のは火藥を鑄りて鐵丸を發射せしものにて、至元十年の襄陽城は抛石機、同十七年揚州砲庫の變は硝石又は砒霜入り爆藥の變災なり。元末にアラビヤ人の手を経て歐洲より金屬製筒式火器を傳へ、支那人は始めて火

第三卷 昨年の史學地理學界

藥の威力の大なるを知りしが、其實用の略確かなるは明の景泰成化の頃にして、當時の火器は石彈を裝發する銅鐵製筒狀礮銃と火藥を以て鐵鑊を發する神機火槍との二種ありしを説き、他は「文永の役に蒙古軍の使用せる鐵砲に就て」石田幹之助、東洋學報)にて宋金の火藥は燒夷劑にして之を用ひし鐵砲も爆發力なく、蒙古人も中原侵入の頃より之を習得して後多少の改良を加へしが吾國に持來りしは手投礮彈にて襄陽砲も石彈にして爆藥に非ず同々礮も投法の新しかりしに過ぎずといへり。

史傳には「忽必烈の事業」(清水靜文、上宮教會講演)、「漢の高祖」(岡崎文夫、歴史と地理)、「鄭和の南海經略」(有高巖、同誌)あり。地理には「唐以前の福建及臺灣」(市村瓊太郎、東洋協會講演)、「曲阜旅行談」(上田萬年、東亞協會講演)、「汴洛紀行」(鈴木虎雄、藝文)、「洛陽行」(石田幹之助、史學雜誌)、「南支那旅行」(見)、「小川琢治歴史と地理」(山東行)、「有堀市三郎、歴史地理」等あり。「支那國都の變遷」大谷光瑞、東方時論は支那古今の國都を評論し、武漢を指いて將來の首都たるべきものなりといへり。

以上は主として支那本部に關せるものなるが、滿蒙につきては「遼代の長春州」(津田左右吉、東洋學報)は之を今の伯都訥の南方、松花江の屈曲點より三四十里の西に比定し、臨潢府より泰州を経て松花江に達する大道の東端に在りとし、「金の外族に對する政

境」(烏山喜一、東亞研究)は金の國初宗族國人の少き頃は漢、契丹、奚、渤海等の外族を優遇せしが、國力漸く充實するに至り世宗は彼等を壓迫して内族の自覺を促せり、されど外族の反感を招きしものにて失敗に終りしかば、金末に再び外族の歡心を求めて却て輕侮を受け遂に衰亡せりといへり、一蒙古の國會即ちクリルタイに就て」(箭内互、史學雜誌)は聚會の習慣が烏丸、鮮卑、契丹等の東胡民族にありて、匈奴、女眞にも行はれしものの如く、蒙古にては第三の合衆忽蘭刺の時にこの事始まり、以後成宗まで歴代の即位皆之に依れるがその次第は候補者の選定、召集令の發布、選帝其他の行事といふ順にて、諸地にて開催し、世祖以後も廢絶せずして皇太子の名に於て指名選舉をなせりと述べ、「元秘史に見ゆる蒙古の文化」(羽田亨、藝文は蒙古族の文化に外來の影響甚多く、殊に開國の傳説、十二支獸を以て年を示す事、親衛及び驛站の制等のトルコ族に負ふ所大なるを言語上より主として考究したるが、前者と共に蒙古研究上深く注意すべきもの、又「蒙古藝文雜錄」(石濱純太郎、東亞研究)は蒙古に關する數部の根本史料の解題をなせり。

西域及び印度に關して「龜・千闐の研究」(羽田亨、史林)は Sylvain Lévi 氏の龜絲研究を Sten Konow 氏の和闐研究とを紹介せるもの、「關資國考」白鳥庫吉、市洋學報)は關資の稱が元來

塞民族の Chaudata 地方を呼べるものにて、塞王國滅亡後此名は傳稱に壓倒せられて行はれざりしに拘らず、漢人は關資が依然印度に存せり信じ、徒に聲音類似の地を求めて晉人は之を「shin」をなす隋にては「Kabul 河上流の Kapisa に在て以て後人を迷はすに至れり」といひ「塞民族考上」(同人、同誌)は西史の「Kabul」は漢史に塞となりて現はれ、又波斯人などのいへる「Kabul」は游牧を樂さざる騎馬民族の總稱にして、漢書に大月氏以前天山に據りしと記せる塞種が此中の何なりしかば大に研究を要すとして、其考證を次第に譲れるが、是等は前記「Levi」氏などの論文と共に西域研究の權威たり。尙此種族につきて「釋迦と塞と緒羯と仇卑」(藤田豐八、史林)は釋迦 Nag 塞及び舍衛、奢摩等の皆同一にして、今の Kabul 河邊に王國を立て「Kabul」の血を多分に混ぜる勇健なる「Iran」人なりしが、後に塞、拓羯は勇者の義となりて他族をも指すに至りたれば、契丹の仇卑も其遺制ならんと言ひ、又別に「嚙延種族考」重松俊章、史學雜誌)は嚙延の稱が可汗の名より起り、其族は土耳古種にても天山北麓に居りしが、第五世紀の初葉の壓迫に堪はず、Sogdiana を吐火羅に分れ赴き後者は第六世紀の初葉強盛となりて廣大なる版圖を領有したりと説けり。更に藝術に互りては「印度アジャンタ石窟寺の藝術」(瀧精一、國華)は第二世紀より五世紀にかけて成りしものにて意趣の自由

表現の妙最も注意すべく、阿育王時代より繼續し來れる中印度藝術を代表するものにて、之に對する希臘の感化は間にして微弱なれど、波斯の影響は意外に大に、健駄羅式ガ子の混入も否定し難しとて圖様に依り丁寧に説明せるが、「健駄羅藝術の批判に就て」(同人、東亞の光)と併せて南方美術研究の好指針なり。

本頃の記事を終るに當りて吾人は昨年に於ける星野博士の歿去を支那學界の大なる損失として追惜すると共に、岩崎家が曩に購入せるモリソン文庫の我學界に貴重なる夥多の新資料を加へたるに、多くの政治家、實業家等の外、松本、小川、内藤三博士、富岡謙藏、羽山、羽、孫、諸氏が支那内地を旅行し、各自専門の立場より實地に就きて精利なる調査を遂げ、有形無形の珍寶を齎らされたる又國華社の澤村、專太郎氏の一行が遠く印度に赴き名畫の研究をなしたつゝあること等々特記して多量なりし前年を送らんとす。(有高)

西洋史 毎歲寂寞を免れざる西洋史界に於ても、近時機運漸く動きて價值ある研究的論著や努力を積まれたる述作の公にせらるゝに至りしは、斯學の爲に慶ぶべき現象なりといふべし。

昨年中に於ける主要なる著書論文中先づ一般的著述としては「世界に於ける希臘文明の潮流」(坂口昂の著を第一に推さるべからず。本書は世界史的見地に立ちて希臘文明の主潮が東西古今

第三卷 昨年の史學地理學界

に及ぼせる影響を説ける者にして、從來比較的閑却せられたるアレキサンドル大王以後のヘレニズムの世界を觀察し、其文化の性質を論じ、又其以後に及ぼせる感化勢力を説くこと精刻を極めたり。次に晚秋公刊せられたる「西洋文明史觀」(齋藤恭三)の大著亦大に注目すべきものなるべし。著者の自序にいへる如く本書は嚴格なる意義に於ける文明史としては多少異論を加ふべきものなれども、政治史に偏し文化的事項の記述に乏しき現在流通の參考書の缺陷を補ひ、西洋史を修むるものに對して、邦家の隆替興亡偉人英傑の事蹟以外一層基礎的な社會生活時代文化の面目推移に關する確實なる知識を供するものたるべし。又英傑傳叢書(實業之日本が發行)は第一編ワシントン、第二編ビスマルク、第三編ルーテルの各書相繼いで出版せらる。一般向の好讀物として西洋史の知識を普及する上に功多かるべし。

特殊問題に關する論著としては古代史に於て「スミール文化の研究」(阿部秀助、史林)あり。パピロニア文化の創始者スミール民族の政治組織、經濟生活、家族制度及宗教の各文化方面に亘りて、最新の研究に據り、其社會狀態、文化の一般を叙述せしものなり。「アレックサンドリアの黄金時代」(坂口昂、藝文)はプロレミ「友愛王」の世を中心としたる紀元前三世紀時代の埃及アレクサンドリアの文化を説き、王の治蹟、人民社會市生活並に學藝

第一號 一五一 (一五二)

の諸方面に就いて、當時の史料に基き其真相を明かにし、以て當代の文化史的意義を示せるものなり。

中世史關係のものとして「フンデルトシャフト」の集團に就いて、植村清之助、史林は「フンデルトシャフト」の起原性質に關しアルンナー氏一派の軍制説を排し、これが血族團、土地占住團と合致せるものなることを論じ「ゲルマンの交通貿易」(藤田)「策、史學雜誌」は紀元前後より民族大移動に至るゲルマン人とローマ文化圏内との交通貿易の狀態を叙説し「伊太利アシヤと其藝術」(濱田耕作、藝文)はアシヤの中心人物たる聖ノランチエスコの性行を觀察し、其精神を傳ふるノシヤの建築、繪畫を詳きて、中世後期に於ける伊太利藝術の新氣運を窺へり。

近世期に入りて「ルーテルの宗教改革を論ず」(高橋謙、史學雜誌)はルーテルの宗教改革説の真意を説き、次で該運動の成功したるは、獨逸に於ける一般狀態とルーテルの人格に因る所以を論じ「第十七世紀に於ける英佛同盟及英國侵入計畫」(長壽吉、史林)は十七世紀中葉に於ける英佛西三國の關係を觀察し英國の宗教的經濟的外交方針を解明して、英佛の親和を説き、英前王と西政府協同の英島侵入計畫に及べり。

次に最近世及歐洲戰役の時局に關する主なる論文を一瞥せん。「一九二二の孤獨接近を論ず」(原勝郎、外交時報)は外交時報二五

〇二號より九號に亘れる長篇にて、かの一九二二年の英陸相ハルデーンの使命を中心とする英獨接近の交渉事件なる外交史上の興味深き問題を捉へ、一九一五年に發表せられ、兩國公表の文書、責任者の演説其他の材料に據り、海軍制限と中立條約の二問題を骨子とする該交渉の順序成行、提案の内容、兩國外交當局の真意に對して推斷を下せるものなり「カルタゴがローマか」(煙山專太郎、史學雜誌)は英獨兩國の爭覇を古代のカルタゴ、ローマに比し、この觀察點より英獨相互の關係態度を歴史的に觀察し、其將來を豫測し「露獨國是の絶對的衝突」(箕作元八、外交時報)は所謂國際的死十字の觀察點より露獨間の死十字、即ち露の南進策と獨の東進策とは兩國の根本的國是にして、其衝突は絶對的に防止し得ざるものなる所以を説き「歐洲大戦の責任」(林毅陸、三田學會雜誌)は各國公表の外交文書を材料として歐洲大戰に對する獨逸の責任を立證せり。

終りに史傳として「サー・ウィリアム・テムブル」(内田銀藏、史林)はテムブルの經歷を叙し、其著述全集中より興味あり且つ主として東洋人に關係ある記事の二三即ち「武勇論」中の支那論、灸治のこと、蘭藝論などを紹介したるものなり。(植村)

「考古學」過ぎし一ケ年に於て考古學が科學としての發達の道程上に取れる進境は特に顯著なるものあり。第一、遺物遺跡の記錄に於

て從來の記述に止めたる不精確なる方法より脱して寫真拓本圖等に依り其の狀態を明瞭ならしめたる報告の著しく増加して研究の基礎を確立し、第二遺跡の調査は從來少許の例外を除き多くは單に偶然の發見に屬したるものが、近時より其の範圍は或種類に限られたるにせよ、河内國府、大和郡澤、尾張縣田等所々に於て種々の團體により學術的調査の實行せらるゝあり、數年來勃興し來れる各府縣の史蹟調査事業と相俟ち考古學上最も重んずべき遺跡の層位學的研究、遺物共存の狀態に關する研究進み、それに關する重要な資料の續々提供せられ學界の面目を一新せんとし、第三考古學と其補助學科たる人類學、化學、數學、史學との交渉親密を加へて諸種の問題に解決の光明を得たること多く、此點よりも考古學研究の基礎を漸次鞏固にならしめ來れり。かくてすべてが年初「我が國考古學の將來」(濱田耕作、大阪朝日)の指示せし道程に向つて進みつゝあるを認め得べし。昨年に於て如何なる問題が主とし研究の對象となれるかを見るにこれ亦た或特種の題目に集注せられたる傾向あるを認む。

本邦に於て一昨年來問題となれる彌生式土器なる一種の遺物及び之を出す遺跡の研究は昨年に於ては最も多く論議せられ、諸方面に於いて此の種遺跡の探究は幾多の重大なる發見を齎し、之が銅劍銅鉾銅鐮石器等の器物との交渉となり、延いて日本人種の

問題に就いての研究となれり。「九州北部に於ける先史原史時代中間期間の遺物に就て」(中山平次郎、考古學雜誌)は此の問題に關する最も注意すべき論文にして、「銅鉾銅劍の新資料」(同人同誌)に於て紹介せる筑前板付字田端の調査より端を發して福岡附近の筑前四郡に於ける此の種遺跡の精密なる調査を載せ、彌生式土器が一方石器類と併出すること共に他方鐵滓銅器をも發見するを指摘して土器の性質を考へ、貨泉の糸島郡松原の遺跡より發見したる事より年代の考察を試み、本邦に於ける金石併用時代の存在を主張して、其の期間の比較的長く且つ年代の新しきを論ぜり。こは「太宰府南方の彌生式土器關係の遺跡」なる地名表及び「銅鉾銅劍發見地と彌生式關係の遺跡」(同人、歴史地理)と共に同地方に於ける遺跡の狀態を明にせるものにして、此の問題研究のエホツクをなせるなり。而して五月下旬には京都醫科大學の鈴木博士が肥後龜村の貝塚を發掘調査して貝層下より完全なる二體の人體を獲、喜田博士は九州南方の調査に於て續々彌生式系統の新遺跡を發見して、九州に於ける此の種の遺物の狀態大に明瞭となりつゝあり。「大畠國出土の銅鐸に就きて」(瀬之口傳九郎、考古學雜誌)はこれに關聯する新事實の報告なり。

畿内に於ける調査研究は六月に京都文科大学が河内府の石器時代遺跡の學術的發掘を行ひ、其の層位學上の調査を全くせるの

みならず、人骨三體を發見して重要な記録を作つたより「河内國府の石器時代の遺跡」(濱田耕作、大阪朝日)學者の大なる注意を惹き七月末より八月中旬に亘る約一ヶ月間鳥居龍藏氏の大河内、和泉、紀伊各地の遺跡調査となり、種々の新資料を得たると共に再び河内國府に於て三體の人骨を發掘し、其の一體は石積みの内にあるを明にせり。「石器時代遺跡調査」(岩井武俊、大阪毎日)は是等の概略を報じたるものなり。これと前後して奈良縣史蹟調査會の委員諸氏は大和新澤村一の遺跡の學術的調査を行ひ、興味ある結果を收めたるあり。十月上旬本山彦一氏は大阪醫科大學の大串博士に囑して第三回の河内國府の遺跡の發掘を行行して新に十五個の人骨を獲、其の女子の三軀には耳輪を有せる新事實を知りまた他の部分より彌生式土器と共に銅鏃二個を發見して考古學上の一大記録を作れり。「河内國府遺跡調査報告」(岩井武俊、大阪毎日)此の發見に依りて是等の人骨が遺跡を作れる住民のものたるは疑を入るゝの餘地なきに至り、人類學上その人骨の特徴は土器使用の民族を決定する鍵となるべく、先正大正四年初内田學士に依りて備中大島貝塚より此の種土器と共に發掘したる人骨の如き、一時其の貝塚人の骨なるかを疑はれたるものもこゝに有力なる根柢を得て、多くの人骨と共に人種問題に重要な意義を有するものとなれり。かくて今や畿内及其附近は研究の

中心點たる觀を呈し、從來興味深き遺跡と認められたる丹後の石より石鏃、銅鏃、彌生式土器と共に貨泉を出すことの報ぜらるゝあり、九州の例と對比して一層の興味を加へ、「越南國東十鄉村河和山及び其の附近の彌生式土器遺跡に就て」(上田三平、歴史地理)また出で、年末に當りては愛知醫學專門學校が熱田貝塚の發掘を行ひて貝塚の状態を調査するあり資料の續出殆ど應接に遑あらず。

土器の製作年代及び使用の民族に就ては既に十數年前一度論議せられたる事ありしが、以上の如き新發見の結果學說の一新を見るに至れり。中山博士は前出の論文に於て、精密なる調査より歸納して金石併用時代の遺物なるを説き、其の使用の民族を以て魏志に見ゆる倭人に比定し、倭人傳の記事を以て遺物の解釋を試み更に「所謂彌生式土器に對する私見」同人、考古學雜誌に於て具體的に、此の土器の性質を考へて古史に見ゆる土師器なりといへり。此の種遺物を以て倭人即華人海部系統の民族の所産なりと喜田博士の力説する所なり、「倭人考」(歴史地理)而も未だ九州南部の調査報告と共に考古學上の見解を聴くに至らず。此の倭人説に對して「有史以前の畿内」(鳥居龍藏、人類學雜誌)は大和の遺跡の何れも彌生式系統なるを指摘して其の使用の民族を固有日本人なりと主張し、又畿内の石器時代の多くの遺跡中一部分アイヌ系

統かと思はるゝものもあるも、大部分は出土の石器土器の形狀滿洲北朝鮮に連絡あり、固有日本人は古く石器使用時代より畿内に住し、之が上流遺物の比較より亞細亞大陸恐らく朝鮮半島を経由せるものと主張したり。「東京灣附近に於ける有史以前の日本人遺跡」(吉田文俊、同誌)は其の調査に係る武藏、南加、瀬貝、塚の狀態より發見遺物の彌生式系統なるを説き、鳥居氏の論據を借りて、固有日本人説に賛成せり。「大和に於ける石器時代の遺跡」(高橋健自、考古學雜誌)は新澤村の調査を記して之を土師部の製作なりとし、土蜘蛛なる先住氏の遺物と説く。「河内國府遺跡調査報告」に於ては一般發掘狀態の記錄以外に、耳輪の恐らく支那將來品なるべしとの濱田教授の説を紹介すると共に之を漢代の缺に比定し黒色土層中より出でたる銅幣を以て支那製品なるを説き、當時の東西交通と金石併用時代の存在を高潮する所あり、人骨に就ての大串博士の概報を同書に附加するや「河内國府の船發掘に就て」(鳥居龍藏、東京日々)は耳輪を漢代の缺とする説を疑ひ之を一層古く考へて、銅鏃の發見の必ずしも國府遺跡の性質を決定するが如き重要なものにあらず、また之を漢代の物となすよりも銅鐸等に關係を求むべきに非ざるかと述べ、「人骨の研究」(鈴木文太郎、大阪毎日)は大串博士の測定に就て意見を記せり。かく種々の學說出でたるがその發表多く概報に止り之が研究を本年に残せり、

第三卷 昨年の史學地理學界

而して使用の人種の如何は延いて日本人種問題と相關聯するを以て、に我が考古學の根本に觸るゝ事となり、大なる興味を惹く。Japanese Origins, (The aboriginal inhabitants of Japan.

(Munro, The Japan Chronicle) は、これに對する一般論なるが、其中に新資料をも示し、彌生式土器にも及べり。而して上記多くの人骨の詳密なる研究結果の發達あるべき本年に於て更に此の研究は一層の進境を見るべく、既に年末東京に開かれたる歴史地理學會の大會に於て諸學者の盛なる論議を聞けり。

かくて彌生式土器の調査と聯關して學者の注意を惹けるは銅、銅銚、銅鐸等なり。これに就ては「銅銚銅劍考」(高橋健自、考古學雜誌)あり。前年度より引續ける論文にして未だ完結に至らず、主として樣式の由來を論じてクリス形銅鐸は支那の戈の系統を引けるものなるを遺物の比較上より考察せり、銅鐸に就ては、研究の基礎をなすべき遺物發見の正確なる記錄を表したる「銅鐸一覽表」(同表附訂)同人、同誌と發見地及狀態の報告に係る「但馬城崎郡港村大字氣比小字鷺崎踏査報告」(園田清、同誌)「備中妹銅鐸發見地踏査報告」(藤原音松、同誌等)あり。「銅銚の測定法に就て」(坪井九馬三、同誌)は數學上より銚の形の拋物線と全體の形狀を觀察して銚形を二分し、實物より得たる公式を應用して天智六年發見の近江崇福寺の銅鐸を復原せるもの。京都理科大學

に於ける近重博士の銅鐸の分析と共に自然科學を應用せる研究として注目すべし。

古墳及之に關聯する研究には「肥後に於ける裝飾ある古墳及横穴」(濱田耕作、梅原松治、京都文科大學報告あり。裝飾ある古墳の綜括的調査報告にして是等の裝飾古墳が所築八種の相違を示すにあらすして支那の影響を受けて成りたる所謂日本人の遺跡たるを論斷せり。これに對して「肥後に於ける裝飾ある古墳及横穴」を讀む)喜田貞吉、史料には模倣の意義を人種的見地より解せんを試み、年代に就ても異見を挿み、築造の民族は文献其他種々の方面より南方系統の倭人即ち卑人海部系統のものなるべきを論ぜり。此の問題は先の彌生式土器と關聯して更に本年に於て論ぜられん。「我が國上代の美術に就て」(濱田耕作、國華)は上述裝飾古墳と石人石馬等より上代の美術の如何なりしかを考察して、甕形墳の起源、墓室の構造上の意義等に論及せるもの、「櫛再辯」(喜田貞吉、歴史地理)は前年の續稿にして、上述九州北部の裝飾古墳に多き石室内の石櫛の系統を論じ、其の起源を支那の甕櫛に求め、駿河に於ける一墓室にある數個の石櫛の形式の比較等より所置石櫛の様式上の發達を辿れるなり。Tombo of the Yamato Ka ce Show European Affinities (Munro, The Jaap Advertiser)に於て日本の古墳の構造を論じ、歐洲のドルメンと比較して人種

問題に入るや、Kellieious a Propas d'une "Conference du Docteur Gordon Munro" 鳥居龍藏、人類學雜誌)はドルメン時代に反對して我が古墳の新しき事と、日本人種問題の意見述べ更に「日本内地に純粹のドルメンありや」(同人、同誌)に於てドルメンの石器時代のものなるを主張して日本に其存在を疑ひ「伯耆東伯郡のドルメン」(梅原末治、同誌)はドルメンの單に形式の名稱なるを説きて、東郷村に其の例あるを説けり。

各地の古墳の調査報告には昨年一月の發掘に係る「宮崎縣、四郡、原古墳調査報告」(濱田耕作、梅原末治、史料)を始め「近江國野洲郡守山町字立入古墳調査報告」(藤井、原、群、集、墳、と、福、井、の、海、北、塚、に、上、梅、學、末、治、考、古、學、雜、誌)「栃木縣上野郡賀間々田村の千駄塚に就て」(森本樵作、同誌)「近江蒲生郡平田村の古墳」(梅原末治、人類學雜誌)等あり。「小野毛人の墳墓と其の誌」(備中、國、小、田、郡、に、於、ける、下、道、氏、の、墳、墓、)「梅原末治、考古學雜誌」山城に於ける宇治宿禰の墳墓と其の墓誌(同人、藝文)は何れも墓誌を藏したる墳墓の構造の調査にて、之より奈良朝前後の古墳墓の形式の標準を得んとせるもの、「再び河内松岳山船史の墳墓に就いて」(同人、歴史地理)は一昨年末に發表せる「河内國分松岳山船史墳墓の調査報告」の補遺にして同種の研究なり「石塚の研究」笠井新也、人類學雜誌)は阿波讃岐に多き特殊の古墳を形式分布より綜

括的に其の發達變遷を論じ、始め一種の宗教的意味より起り三期の階段をなして發達せりとなせり。

上代に於ける城郭關係の遺跡の研究には、所謂神龍石に就いて「白鳥庫吉、史學雜誌」と「天智天皇の屋島城」關野貞、同誌の二編あり。前者は數年前の講演録記にて此の特殊の遺跡を言語學上より見て考古學者の山城説に賛成を表し、當時の我が國の形勢より築造年代を考察せるもの、後者は一般朝鮮式山城の概形を擧げて、同博士の發見せる屋島城壁の現狀を詳記し、その築城の意義に及べり古寺址其他の調査としては奈良縣史蹟調查會報告載する所の山田寺址、比蘇寺址（天沼俊一）の精密なる實測圖、高市郡高市村發掘の異形石造物、大野寺石佛調查報告等を初め、磯城郡城嶋村にある白鳳期の石佛を紹介せる「忍坂の藥師堂」（水木要太郎、史文）「攝津國豐中村廢善光寺址」（山田角人、考古學雜誌）「備前及備中兩國分寺古瓦に就て」（下總國分寺古瓦に就て）（以上住田正一、同誌）等を見る古代の船舶の研究には本年六月攝津縣江町にて發掘せる大獨木舟に關する報文（大道弘雄、同誌）「熊野の諸手船」（西村真次、單行）「尾張名所圖會に見ゆる古船」（同人人類學雜誌）等あり、氏は船を通して我古代民族の系統を尋れ主として上述鳥居氏の論を賛成せり。

朝鮮方面にありては總督府の古蹟調查事業が著々進行して、關

第三卷 昨年の史學地理學界

野、黑奴、三浦、今西、鳥居等諸學者の各實地調査を行ふあり、就中、今西學士は咸安の古墳を發掘して、其の一より任那の風俗を徵すべき多くの遺物を得、谷井學士は又扶餘のそれより、百濟古墳の壁畫あるものを發掘せり。「新に發掘せる樂浪時代の古墳」（關野貞、考古學雜誌）は一昨年の大同江岸の古墳調査より得たる漢晉の古瓦、銅鏡、錢幣、磚、瓦、弩、刀劍、古鏡等を調査して當時の文化を偲べるもの、新に發掘せる高句麗時代の古墳（同、人類學雜誌）は同じく平壤附近の大城山麓の古墳より得たる壁畫、陶器等を順次解説し、此種の古墳が安祿宮址を中心として存せるより見て長壽王の郢址ならんといひ、「新に發掘せる高句麗時代の繪畫」（同、國華）は前記の壁畫並に天井の紋様を詳説して北魏式影響以前のものと斷ぜり。又昨年中「朝鮮古蹟圖譜」が其の第三・第四の兩冊を出して、古朝鮮より新羅時代に亘る遺品の集成を試みたるは特記すべく、主任者たる關野博士が編纂の勞を多として佛國學士院より賞金を贈られたるは、此の事業の世界的なるを認められたるもの我が考古學上の名譽とすべし。

支那方面に於いては不幸遺跡の研究の見るべきなきも、遺物殊に銅器と土器が多く考究せられたり「漢以前の土器に就いて」（濱田耕作、國華）は之に關する西洋學者の説を紹介批評して、南滿洲遼城驛の西方、家溝より明刀錢と共に出てたる遺物の様式より

當代土器の特徴を明示せるもの、「古那の古銅器と土器との關係に就いて」(同人、東洋學報)は先づ銅器が殆んど存在發見の狀態を知るを得ざるを以て學術的價值少きことを述べ、次に土器と銅器との相互に影響せることを數多の例を示して説明し、兩者間比較研究の有益にして、又時代の好尚を反映し、他物と共存狀態の明なる土器は銅器研究の基礎をなすものなりと説けり。數年來學者の注意を惹ける鏡鑑の研究には「漢代より六朝に至る年號銘ある古鏡に就て」(富岡謙齋、考古學雜誌)あり。五月丙午日なる銘文は鑄造の吉辰として漢代に用ゐられたるを説き、從來の年號鏡の比定の誤れるを訂し、年號鏡より見たる鏡鑑樣式の變遷を論じて一般年代推定の標準に資したるもの、「支那古鏡圖說」(同人、國華)は前漢末より六朝に亘る各種の古鏡の優品を圖示して、その間に時代の特徴に就ての所見を附せり、「海東葡萄鏡に就て」(原田淑人、史學雜誌)は此の特種の鏡に表れたる文樣の分子の一々を考察して其の完成に至る徑路を窺ひ、それが六朝末に支那に既に行はれたる葡萄文樣と四神十二辰其他獸形鏡の圖形とを併せ、之を自由に變化せしめたるものなるをいひ、其の精巧を極めたるは唐の玄宗の頃なるべしと説けり。是等の研究は京都大學の近重博士が多くの實例に就て其成分の化學的分析を行ひ、之より年代を推知せんと試みて著々與味ある成果を得つゝある(大阪朝日)と相

俟つて一大進歩を劃すべし。其他漢印の品質と鈕式とに就て(太田孝太郎、考古學雜誌)及び「元崗書印」(石濱純太郎、史林)あり、更に西洋の方面を見るに、數編の重要な研究を得たるのみならず、アッシリア學の泰斗セイス老博士の來朝して、前在十ヶ月に近く各所の會合に其の蘊奥を披露せらるゝあり、京都大學に於ける「パピロニアに於ける古代住民の言語及文字」の講演の如きは斯學に光彩を放てり。「クリート島の考古學上の遺跡」(濱田耕作、太陽)は著者が親しく調査せる遺跡を記して、此の地中海に榮ひたる驚くべき文化を考古學上より紹介し、「エトルスキの遺跡と其の文化」(同人、史林)は先づエトルスキの人種についてリヂヤ根據説の採にべきをいひ、次でチニルヴェテリを初め其の主要なる遺跡の實地調査を記述して、就中バンタキヤの臺地上にある墳墓の構造コルチトの墳墓の壁畫を詳にし、其の文化が希臘の影響を受けながら青銅の製作に長じ、黄金の裝飾細工に巧妙にして後の羅馬建築に見ゆる真正のアーチを盛に使用せる事婦人の位置を尊重せる思想とを指摘し、羅馬に及ばざる影響に多きを説けり。「埃及に於ける蓮華模様の發達及び變遷」(塚本靖、考古學雜誌)は古代埃及の蓮の性質を考へ、其の文樣としての發達の徑路を遺品に依りて各方面への傳播を調査せるもの、「希臘羅馬の古鏡に就いて」(大隅爲三、同誌)は其の遺品の概説として見るべく

「古代希臘の瓶器」河村定雄、美術新報、「タナグラ人形」（大隅爲三、同誌）の兩編は西人研究の紹介なり。

考古學一般に關するものとしては高橋健自氏の「考古學」が訂正再版を出したる外に、柴田常惠氏が新に國史講習錄の爲に日本考古學の一般を比較的詳述しつゝあるあり。又近時世人の注意が此の方面に向へることゝ新聞紙上に關係記事の現はるゝこと多し。此の際考古學會が本年の總會に於て日本考古學發達史（三宅米吉、高橋健自等考古學雜誌）を説けるは興味深し。

最後に考古學と特殊の關係ある補助學科の二三を瞥見せんか。人類學に於いては前掲人種問題關係事項以外に「アイノと日本人との指紋の差異」「八俣遠呂智とトル土人（以上長谷部言人、人類學雜誌）あり。共に人類學上の事實より日本人種若しくは日本の先住民問題に關して一種の見解を試みたるもの、土俗學上にありては「朝鮮の土器作り」「高居龍藏、同誌」「オナベ島土人の文身に就て」長谷部言人、同誌「倭人の文身と哀牢夷」「東北亞細亞の無言貿易に就て」（以上高居龍藏、同誌）「南洋占領地に於ける貨幣の起源」大野雲外、同誌等あり。

金石學に於いては鐘の研究に「博多聖福寺の朝鮮鐘」「筑前國內の朝鮮鐘と其の模造品」（以上中山平次郎、考古學雜誌）の二編あり。「法隆寺に於ける室町時代の瓦銘」天沼俊一、同誌と「度長

時代の基督教信者の墓所」（島田貞彦、同誌）は特殊の遺品を記せるもの、「福岡附近に於ける板碑と五輪塔との關係」（池上年、同誌）「大隅に於ける九州系統の板碑」（瀬之口傳九郎、同誌）の二編は樣式の研究を主とし、殊に前者の如きは五輪塔より板碑に至る經路を辿れる論文として注意すべく、「黃銅に就て」（小此木忠七郎、同誌）は成分に關する記錄を載せたり。（梅原一）

地理學界

概況 大正六年は地理學に取りて頗る多事なる一年なりき。政治地理に於ては、歐洲戰亂が遂に西半球に波及せるが如き、露國が大革命的渦に陷れるが如き、其影響の及ぶところ俄に測知すべからざるものなり、更に露國第三の商港たるリガの陷落中世以來の名港ヴェニスの危急、將又英軍のノンボタミア政略及パレスタイン進軍の如き、戰後に於ける國勢の均衡地圖の着色に大なる變動を生すべきを豫想せしむ。經濟地理に就て見るに本邦の貿易が戰亂の好影響を受けて總額二十五億圓、輸出超過六億圓の新記錄を示したるは最注目すべし。而も各國、自給自足主義又は正貨流出防止策より來れる禁輸政策は本邦の貿易をして漸く反動期に向はしめ、中にも米國の製鐵輸出禁止の如き、本邦工業界に多大の影響を與へたり。此に於て朝野競うて支那の鐵礦に注目するに至り安徽省桃冲鐵礦、鍾山鐵礦、山東省金嶺鎮鐵礦の如き、皆邦人の手

第三卷 昨年の史學地理學界

第一號 一六〇 (一六〇)

に開發せられんとし、又滿鐵の鞍山站製鐵所創立及本溪湖製鐵所の擴張は前者と相俟て本邦製鐵業の躍進を促すべし。小川理學博士は、大正五年秋及六年夏、再度支那に出張して、以上の諸鐵山の大部分を精細視察せられたり。海外に於ては、南滿洲のハートカーガスタより、西滿洲のクルガルチーに至る滿洲大陸横斷鐵道の落成は最記憶すべきものなるべし。探検界に於てはシャツクルトン氏の南極探検隊が、多大の成果を齎して纔に南米フオーグランド諸島に歸還したりとの報を得たれども、未だ其詳細を明にするを得ず。昨年度に物故せる人にて地理學に關係ある人としては花房子爵、菊池男爵を擧ぐべし。花房子爵は仁川開港談判當事者たりし人、菊池男爵は本邦を代表して萬國千午線會議(明治十七年華盛頓府開催)に出席し、本邦標準時の設定に與り、又震災豫防調査會の創設に關係せる人なり、而して兩氏共に、多年地學協會副會長として、本邦地理學界に貢獻せる所尠からず。

出版界を見るに獨逸出版物が英國の封鎖の爲全く輸出せられず、佛國の出版界亦騷亂の影響を蒙りて著しく萎縮したるを以て、轉々秋風落葉の感なくんばあらず、今各項に分ちて概況を報告すべし。

【通論】「我等の住む世界」The World we live in. ウォリアムス(編)は通俗地理學通論とも言ふべき書にて鮮明なる幾多の挿圖あ

り。「伊能忠敬」(帝國學士院發行)は我國最初の測量家を傳せるものにして、昨年度地理學界最大の出版物たるべし。「熱帶農業」Tropical Agriculture (ウィルコックス)は熱帯氣候が人類に及ぼす影響より説き起し、熱帯の農作法、熱帯植物各論に及び、舊石器時代の人類「The Man of Old Stone Age」(オスボーン)は地理學考古學上の快著なり。「文明と氣候」Civilization and Climate (ハンチングトン)氣候の文化に及ぼす影響を論じたるものなり。

諸雜誌に登載せられたる論文の中「バルハンミスリバチ」(徳田貞一、地質學雜誌)は因幡濱坂地方の「スリバチ」と稱する地形を説明して、之を沙漠地方にある假月形砂丘(Lanchan)と比較論究したるもの「火山島嶼の蝕磨輪廻」(辻村太郎、同誌)は日本の各火山島に、水蝕と海蝕との二營力が働きて生ずる各時代の地貌を考察せしもの、「肥前小濱の溫泉塔問題」(神保小虎、同誌)は小濱溫泉の沈澱成生物に關する、佐藤傳藏 園山市太郎二氏の觀察を比較し、兩氏の氣付かれざりし點を指摘したるもの、「歐米の水河時代と其分類」(田中館秀三、同誌)はジュニアムスゲイキーの研究を基礎とし水河期と間氷河期とを列挙し、各地層を之に當てたるものなり、「人猿中間動物ヒセカントロパス時代の地理」(佐藤傳藏、地學雜誌)はヒセカントロパス(一八九一年ジュゴア

氏が爪哇島にて發見せし人猿中間動物の化石の發見せられし地層の位置、及他の化石より推論して、當時爪哇は今日より氣溫低く、雨量遙に多かりしことを證明し、其時代に從來考へられしが如く、第三紀の末にあらすして、歐米の第一或は第二氷河時代の間に相當することを論じ、「緯度變化に就て」(木村榮、東洋學藝雜誌)は、緯度變化は、地球廻轉軸の變化より起ること、其學說及觀測の歴史、現在の觀測設備及之には高層氣象觀測の必要なる事等を論じ、「鐵鑛床と石炭」(鈴木敏、地學雜誌)は氏が將來公にせらるゝ應用地質學の一部にて、鐵鑛賦存の狀態及其成因、石炭の種類、成因等につき、詳細の説明をなし、殊に日本支那及歐米各國著名の鐵山、炭田を引例として、吾人を益するところ少からず。

火山の調査報告には、「櫻島大爆發」(小藤文次郎、英文理科大學紀要)「陸奥の恐山」(佐藤傳藏、地學雜誌)「溫泉所火山」(駒田亥久雄、同誌)「船形火山に就きて」(小倉勉、地質學雜誌)「箱根火山鳴動に就て」(同人、同誌)「樽前ドームの形態と新噴火」(田中館秀三、同誌)等あり。「海上より見たる現歐洲戰役」(滿部洋六、地學雜誌)は現戰役に關する唯一の「海上軍事地理學の研究」といふべし。

【地誌】 本邦地誌に關するものは大日本地誌の完成後まごまり

たる著述少し、「日本群島地質構造論」(矢部長克、東北大學紀要)は本邦の地質構造に關する最新の研究といふべく、「樺太の話」(中目覺)は樺太土人の土俗を説きたるものなり。

支那に關しては、地學協會の事業として、曩に同會より囑託派遣せる調査員の報告漸く集まり、東亞同文會亦率先して調査に従事したれば、彼此相俟つて、隣邦の地理が邦人の手に依つて開拓せられんとするに至れり。殊に地學協會發行の「支那調査報告書」は野田勢次郎、石井八萬次郎、山根新次、福地信世、小林儀一郎杉本五十鈴の諸學士が明治四十四年より大正四年までに調査せる所にて、其區域、兩廣、閩浙、兩江、湖廣、巴蜀の地方に跨る、支那地理の科學的研究はリヒトハーフェンに始まれども、氏の調査は主に北支那にて、殊に氏以後に於ける斯學の進歩は著しきものあれば、本報告書の如きは、氏の「支那」以後に於ける最大の權威たるべし。同會出版の「中支那及南支那」は野田理學士の編纂に係り、前書の副産物とも見るべし。東亞同文會にては「支那の工業」「支那省制全圖」を出し、外務省通商局にては「香港事情」「福建事情」「北滿洲事情」等を出せり。皆人文產業方面の良參考書なり。「無盡藏の支那貿易」(東洋タイムス社發行)は支那人の衣食住の狀態を通俗的に解説せるもの。「長江大觀」(山根俾三、編輯)は揚子江沿岸の寫真帖なり。雜誌に出でし論文には、「江浙省

第三卷 昨年の史學地理學界

第一號 一六二 (一六二)

錢塘江上流地方及江河省廣信河流域」(山根新次)「江西省贛江及袁江流域」(野田勢次郎)「南支那地質大要」(矢部長克)「中支那及南支那の地貌」(野田勢次郎)「北支那の地形及地質概観」(小川琢治)「(以上地學雜誌)」(四川省巴蜀盆地の地勢及地質」(小林儀一郎、地質雜誌)等あり、其中、野田、小林、山根三學士の論文は、各自多年調査せる區域に就ての報告の一部なり。矢部博士の論文は、地學協會派遣員の採集せる化石を研究せる結算により立論せる南部支那の地質構造論なり、小川博士のものは、大正五年秋に出張調査せる山東地方の地形地質に關する論文にて、新に採集せるを化石により、該地方の地質構造を推論し、リヒトボーフエン氏の誤謬を指摘せるものなり。

支那以外の亞細亞地誌に關するものには「ベンガル、ヒマール、オリッサ シッキム 西金」(オーマレー著)は印度各州誌の一にて、地形人文に互り、最新の資料を供給し、「極東北西北利亞」(North-East Siberia (シベクロズスキー))はヤクーツク地方の旅記なり。「メンボタシャ平野」(山崎直方、東洋學藝雜誌)は同平野の地形人文を述べ、古代文化の中心が如何に現時荒廢せるかを序し、列強の之に着目せる所以より今次戰亂中に於ける同地方の戰局をも論ぜるものなり。

歐洲に關するものにて、「露西亞と其富」(La Russie et ses

richesses (エチアンヌ)は露國の人文地理を詳細に記述せり。「英國の霸業と其危機」(England's Hierarchy und ihre Krisis)は現代地理學界一方の權威と稱せらる、ヘットナー教授(ハイデルベルヒ大學)の著にて、田中萃一郎氏により、「大英國霸業」と題し譯出せられたり、本書は英國の地理より説き起し、植民帝國としての發展世界經濟上に於ける英國の地位を序し、最後に英國の世界的霸權の到底永く維持すべからざる所以を論じたるものなり。其他「ルーマニア人とルーマニア」(山崎直方、東洋學藝雜誌)は、同國の對奧宣戰の理由及宣戰の影響を民族的及地理的に考察せり。

同様に就ては、「移民の潮流」(The Tide of Immigration (ダールン))は北米合衆國の移民の數、其消長、國別調査、之が合衆國に及ぼす影響及之に對する政策等を論じ、「パナマ運河と商業」(Panama Canal and Commerce (ジョンソン))はパナマ運河の商業上に及ぼす影響及之に對する政策を序し、「亞米利加合衆國のバナマ運河利用と其反動的活動」(内田寛一、地學雜誌)は同運河開通後最初の一年間の統計によりて、該運河の利用程度、其收入計算を挙げ、通航船舶の比較的少きは歐亂の影響の外、運船經費船腹不足等各種の理由あるを指摘し、終りに運河の競争線としてテワンラベック鐵道其他各種の事情を列舉せり。「亞刺斯加ヤク

彙報

タト灣) (井上馨之助、同誌) 同グレーシア灣(同人、同誌) (は香者が大正二年、萬國地質學會議に出席せる時、會議出席者一行と共に視察せるアラスカ地方氷河の地形及峽灣の状態等を序したるものなり。

亞弗利加に就ては、[獨領亞弗利加] The German African Empire (カールバート) は獨領亞弗利加植民地、即東亞弗利加、南亞弗利加、カメルーン、トーコー各地の一般地理を記述せるものなり。

大洋洲、南洋方面に關するもの、中、「布哇」(ケロールド) 及「進歩せる新西蘭」(New Zealand and in Evolution) は各其地方の地理を説き、主として産業方面を序したるものなり、又「新古領地視察報告」は彙に文部省より南洋新古領地視察の爲派遣せられたる人々の報告を蒐めたるもの、「深洲事情一般」(金原信泰、地學雜誌) は深洲の地文人文に關し一般的に序述したるもの、「爪哇の氣候と住民の生活」(石橋五郎、史林) は爪哇の氣候が住民の生活上に及ぼせる各種の影響を記せるものなり。〔下田〕

●京都帝國大學行幸及天覽品

聖上陛下に於ては、去秋滋賀縣下陸軍大演習御統監の爲め西下あらせられ京都皇宮御駐蹕中、十一月十日を以て京都帝國大學に行幸の儀を仰せ出されたり。京都大學の聖駕を迎へ奉るこゝ方に未曾有の盛儀なり。此日雨續朝隙に輝き午前九時文科大學陳列館に進御、同館内御座所に入御あり、次で圖書館内に於ける陳列品を觀覽あらせられ各擔任教授の説明を聴取し給ひし後、御座所に入御、午前十時四十分を以て行幸あらせられたり。當日天覽品には、鴨綠江遊廻橋模型(二見工科大學教授説明、隈鐵標本(齋藤工科大學教授説明)、天然色寫眞(中澤工科大學教授説明、赤塚正賢、朝山素心進講事蹟に關する史料(三浦文科大學教授説明)、仿製漢鑑(近重理科大學教授説明)、地震動様式及阿里山紅梗の年輪(志田理科大學教授説明)等あり。其中、赤塚正賢及朝山素心進講に關する史料及説明を記すれば左の如し。

一、後水尾天皇宸翰

京都市 赤坂政次藏

此宸翰は明曆四年二月九日 後水尾天皇赤塚正賢を召し給うて孟子の進講を問召されし時御感の餘り大學の一句を染て賜はり